定本

吉井勇歌集

911.168
Y854y
y
00344578

定本

吉井勇歌集

養德社藏版

911.168Y854yy

目次

第一卷　酒ほがひ……一
第二卷　昨日まで……二五
第三卷　祇園歌集　祇園双紙……四一
第四卷　黒髪集　仇情　未練……五三
第五卷　毒うつぎ　河原蓬……八一
第六卷　鸚鵡石　悪の華……九三
第七卷　夜の心　鸚鵡杯……一〇三
第八卷　人間經……一二一
第九卷　天彦……一六九
第十卷　風雪……二四三

國立國會圖書館藏書
寄贈
天理教本部
國立國会
29.9.-6
図書館
344578

定本 吉井勇歌集

第一卷

酒ほがひ

「酒」ほがひは著者の第一歌集であつて、明治四十三年九月、東京市神田區表神保町の昂發行所から出版された。裝幀は高村光太郎氏、カットは藤島武二氏の筆に成るもので、木下杢太郎君の口絵が一葉入つてゐたが、これはBACCHUS ET VENUSと帆の上にしるした船を迎へる群集歡喜の圖を描いたもので、當時流行の南蠻情調の深いものである。これを上梓するには、亡き平田修君の好意に負ふところが多い。

酒ほがひ

若き日の夢

その一

かにかくにいとにこやかに親しみぬ深なさけびと薄なさけびと

七人（ななたり）の子がうつされてありしごとわれ映されぬ君が瞳に

鎌倉の扇が谷の山荘に朝のわかれを惜しみけるひと

君思ふ子なれどをかし或る宵は嚢家（なうか）に入りて賽投げしかな

かなしみと云ひがたきほどのかなしみに微かに顫ふわれの心か

よその子を思ひうかべてある時と知らでわれ凭る君が腕（かひな）に

饗宴のただなかにして君思ひこころ遠かに寂しくなりぬ

こがらしに耳傾けぬ遁れゆく君が心に聴き入るごとく

嵐よりややはらかく胸を吹くねたみにまさる趣はなし

この夜また身に染むことを君に聴く沈丁花にも似たるたをやめ

その二

われ生る君なほ在らずわれ長す君ありすでに戀人として

傍のつれなしびとは遠方のめでしれびとに及ばざるかな

姦ましくなに囀るとわれ問ひぬ默すときなき鳥の少女に

われなくも安寢しおはせおごそかにかの大空は君を護らむ

大空はかぎりもあらぬ眼もてわれらを眺む祕めがたきかな

泣く少女笑ふ少女と二人あるごとくに變る君なりしかな

黒髪が錨綱より強きこと君に教へてかへりけるかな

かりがねは空ゆくわれら林ゆく寂しかりけるわが秋もゆく

その三

君かかる寂しき人を選びしがあやまちなりとわれは別れぬ

思はずと密かに云ひしわが聲の高かりしにも驚かれぬる

ただひとつ心の奥のこの祕密あかさず別
る慽みなるかな

このうへの君が歎きを見ざるため海へ往
なむと思ひ立ちにき

夏のおもひで

夏は來ぬ相模の海の南風にわが瞳燃ゆわ
がこころ燃ゆ

夏の帶砂のうへにながながと解きてかこ
ちぬ身さへ細ると

君がため瀟湘湖南の少女らはわれと遊ば
すなりにけるかな

赤き旗高く掲げし玉突場海へまがれば君
が窓見ゆ

君が家の走りづかひの下男あまりみにく
き文使ひかな

友ありき禁衞軍の服を著て己がもののご
とわが君を云ふ

滑川いくたび君の手を取りて夜半の水を
渡りける子ぞ

草枕砂まくらしてものがたる男をみなを
さはなとがめそ

わが耳に夜がささやくとうたがひぬ傍に
ある君を忘れて

船大工小屋の戸口にあらはれてわれらを
笑ふ晝顏の花

思はずといと冷やかに云ひはなち猛然と
して獅子窟に入る

鶴が岡の八幡宮の石段の十級にしてつか
れたるひと

鎌倉のうら山づたひ君とゆく山百合の花
月草の花

君見ゆる貝細工屋の招牌をすこしうごかし海の風吹く

漁火にまたも心をさそはれぬふたり濱邊に夜もすがらゐむ

或る夜半は大雨に濡れて入りきたる君が姿におどろきしかな

君が窓海鳥玻璃にあたる時つと離れたるわれならなくに

わが住みし山寺の縁に脫ぎ棄てし君が草履にこほろぎの鳴く

砂濱の船に腰懸け君に聽く戀ものがたりあはれなるかな

月夜よし七里が濱の水際の白く顚ふを君とながむる

土蜂のうなりを聽きてわれは寢る戀ももの
のうく砂山に寢る

君とわれ夜半の二時ごろ八幡の石の鳥居
の臺に憩ひぬ

砂山に來よと書きこす君が文數かさなりて夏もをはりぬ

海に入り浪のなかにてたはむれぬ鰭の廣
もの狹ものらのごと

遠空のいなづま見ればその宵の玻璃窓の
外を思ひ出づといふ

もろともに鎌倉憂しとぬけ出でぬ君や誘
ひしわれや誘ひし

砂の上への文字は浪が消しゆきぬこのかな
しみは誰か消すらむ

伊豆も見ゆ伊豆の山火も稀に見ゆ伊豆は
も戀し吾妹子のごと

朝ごとにかならずおなじ濱邊にて會へば
笑ひてゆく少女あり

身に染みぬその夜の海の遠鳴も鷗のとゑ
も君がなさけも

藻のかをり四邊をこめぬ黒髪のにほひよ
りやや淡けれどよし

その夜半の十二時に會ふことなどを誓へ
ど君のうすなさけなる

なでしこや大佛道の道ばたに君が棄てた
る貝がらの咲く

草土手を蜥蜴はしりぬわが君の足の音に
もおどろくものか

かなしげに海邊の墓のかたはらの撫子を
摘みかへりたまひぬ

或る朝のそぞろ歩きに拾ひたる櫛ゆゑ心
みだれけるかな

滑川越すとき君は天の川白しと云ひて仰
ぎ見しかな

濡髪は夏をはるまで乾くことあらじと君
をのろひしや誰

眇目の山莊守がわが君を思ふて病むと聽
くはまことか

かの宵の露臺のことはゆめひとに云ひた
まふなと云へる君かな

酒ほがひ

少女云ふこの人なりき酒甕に凭りて眠る
を常なりしひと

酒びたり二十四時を醉狂に送らむとして
あやまちしかな

覺めし吾醉ひ癡れし吾今日もまた相爭ひ
てねむりかねつも

酒の國わかうどならばやと練り來貴人ならばもそろと練り來

かの君の涙の酒に醉ひけるよ人は知らじな酒のかなしみ

酒みづきさなよろぼひそ躓かば魂を落さむさなよろぼひそ

諾とも云ひ否とも云へるまどはしき答を聽きて酒に往きける

杯のなかより君の聲としてあはれと云ふをおどろきて聽く

わが胸の皷のひびきたうたらりたうたうたらり醉へば樂しき

眼さきに蒼蠅と見しは獅子なりきものあやまちしとろとろの目よ

君なくばかかる亂醉なからむとよしなき君を恨みぬるかな

かかる世に酒に醉はずて何よけむあはれ空しき恒河沙びとよ

醉びとよかなしき聲に何うたふ醉ふべき身をば歎けとうたふ

さな醉ひそ身を傷らむと君云はず酒を飲めども寂しきかなや

酒を見ていかにせましと考ふるひまに百年千年過ぎなむ

戀がたき挑むと云はれおどろきし弱き男も酒をたうべぬ

な戀ひそ市の巷に醉ひ癡れてたんなたりやときたる男を

踰越にもの云ふひとの濡髮をただ見てあるにこころよろしき

博打たずうま酒酌まず汝等みな日をいただけど愚かなるかな

かなしみて破らずといふ大いなる心を持
たずかなしみて破る

事わかず疑ひしげくなる時は壺の口より
酒にもの問ふ

覆へす酒の甕より出でたるは誰にかくせ
し誰の艶書ぞ

弱きかな戀に敗けては酒肆に走りゆく
といくたびかする

酒に酔ひ忘れ得るほどあはれにも小さく
はかなきわれの愁か

わかうど

薔薇の香にほひきたりぬわかうどが涙な
がしし物語より

ややありてああえや忘るその夜をとわが
わかうどは潤み聲しぬ

人の世にふたたびあらぬわかき日の宴の
あとを秋の風吹く

われ黯す都大路を練る子らに常にうたへ
るわかき人らに

やはらかき腕に凭りて思へらくたはむれ
ぬ子は趣あさかり

伽羅の香のみなぎるなかに胡座する人も
なげけと秋のきたれる

うらわかき都びとのみ知るといふ銀座通
りの朝のかなしみ

われゆきぬ驚破といへる言葉をば日に七
度もさけぶ男と

すかんぽの莖の味こそ忘られねいとけな
き日のもののかなしみ

逞ましき男の肩に凭る時の心だのみを忘
れたまふな

珈琲の香にむせびたる夕より夢見るひと
となりにけらしな

市井夜曲

少女(をとめ)みな情を知らずいまははや末法の世
となりにけるかな

いざなふは夕蝙蝠のはばたきかかの遊び
屋の店清掻(きよかき)か

いにしへはころべころべと繪を踏ますい
またはむれにわが足踏ます

あやまりて君が心のありかをば無頼の子
にも教へけるかな

疊(たた)りたる君が心をしのびゆく兩國橋のあ
けがたの月

あなをかしやはらかき手にとらはれて亂
行者も酒をたうべす

おもしろし六が二となる賽の目も娼家の
子らが心がはりも

その男會へばかならずあゝ切(せつ)に元祿の世
を戀ふと云ふかな

蘭蝶を聽きつつかかる時死ぬも惜しから
じとぞ思ひ初めにし

いまの世の聖(ひじり)をわらふ彼等みなこのうつ
くしき夢を知らざる

後の戀

君見ずとかたく誓ひて來しものをもの狂
はしやまた君を見る

この幾年(いくとせ)いづこに往きておはせしや問へ
ど笑ひて答へたまはず

われと別れ今日までひとり荒山の窟のな
かにおはせしものか

君にちかふ阿蘇の煙の絕ゆるとも萬葉集
の歌ほろぶとも

そのかなしみいまは微かになりぬれど消
ゆるばかりになりぬれど猶

ただひとつ君をかなしむ目の縁のおしろ
いやけの薄鉛いろ

砂山の麓にのこる足のあと戀の足あとな
ほ消えずけり

斑猫の家と思ひてまた入らず招きたまへ
ど誘ひたまへど

秋の風肌寒うして堪へがたき時のみわれ
を思ひ出づる君

ただひとつ汝を怖るわが少女つねに脫が
ざる黑の手套

何ゆゑかはじめて君を見しごとくかりそ
め言も打出かねつも

昨夜の九時かへりたまひし後書くといと
うつつなき消息も來ぬ

紫をとめ

杯をとどめし君が白き手はあたら筑紫の
芹を摘むかな

築地なるわだつみ色の館より出で來し去
年の君をこそ思へ

とこしへに別るる君にあらねども別れた
る夜の氷雨をおもふ

停車場の靈の音を聽きながら筑紫をさし
て往ける君はも

筑紫ゆき去年わが靴に踏みにたる土をし
踏まばこころ躍らむ

歸らずばながく筑紫に君あらばまた相見
すばいかがすべけむ

しめやかに降りつもりたる雪となりて君が心は一夜のこりぬ

その夜より午後の八時の時を忌むかなしき時を思ひ出づるゆゑ

不知火の筑紫の海に棄てにゆく君が心の惜しくもあるかな

危ぶみぬ筑紫をとめはその胸を水甕のごと思へりと云ふ

いづれともわかなく君は眺むらむ鎌倉の海長崎の海

うらがなしじやがたら文にあらねども涙もよほす君が消息

その秋をなほも思ひてかなしみぬその後みたび蘆の花ちる

羈旅雑詠

其一　柑子のにほひ

明治三十九年十月伊勢紀伊の旅にて

ものなべて身に染むゆふべわが船の笛のひびきも耳に殘りぬ

眺むれど船のかげ見ず一條の太き帆綱ぞ大空を切る

空と海たぐひもあらぬ全きもの二つながめて心なごみぬ

われ迷ふ橘の森ひろうして海邊山邊の方もわかなく

われは練る昨日は都大路また今日は柑子のかんばしき道

山に問ふ山は答へず山をゆき山のこころをいまださとらず

常世の子現世の子と會ひぬべきところと高き山しづかなる

ああわれは國來と呼びし神のごと君來と
呼びてかへりみするよ

善ならぬはた惡ならぬなかほどの事を好
まず旅にしあれど

其二　海のかなしみ

明治四十年八月九州の旅にて

山荒く海きほへども少女らはうつくしと
いふ筑紫よく見む

旅ゆくか或は戀より遁れしか知らずうつ
けて海にうかびぬ

はじめの日何の思ひか身にあらむただい
たづらに山見海見る

漏刻の水落ちつくす寂しさをこの夜おぼ
えつ夏の旅寢に

旅ゆけば唐棣の衣もおもしろと或る夜か
づきて君がり通ふ

あたらしき船唄かなし松の葉の琉球組の
唄のごとくに

ああその夜無花果の葉のあなたより覗き
し星をえこそ忘れね

遠びとのほのに息づく時なるや風はかす
かに山を訪ふ

うれなくも稻佐少女はことさらに酸き木
の實をわれに與ふる

君に似し天草島のたをやめの髮おもしろ
し總角にして

第二巻

昨日まで

「昨日まで」は「酒ほがひ」に次いで、大正二年六月に、東京市京橋區銀座三丁目の籾山書店から發行された。白茶色の紙表紙で、見返しにも同じ色の紙を用ゐた。すべて書肆主人籾山庭後氏の意匠に成つたものであつたが、洒脫にして高雅、氣品のある好裝幀であつた。口繪はなく、巻頭に蛇を圖案化したカットがひとつ入つてゐたが、これも内容の一部を象徴してゐるやうなところがあつてよかつた。

昨日まで

郊外

たそがれは遠き秩父の連山(れんざん)を眺めて君を
思ひけるかな

門出でていづこともなく歩みゆく日毎の
吾をわれとあはれむ

蠟燭は月草のごと燃えにけり五月(さつき)の夜の
わかうどの窓

鎌倉の海のごとくにひるがへる青草(あをくさ)に寢
て君を思はむ

おもひでは雪を戴く遠山(をやま)を野のはてに見
るごとくかなしき

野を遠くかなしき唄をうたひゆく子あり
と君に書きしを思ふ

君が家のいとあはれなる屋根の草その草よりもあはれなる戀

ああ三年まへの夏こそ忘られね君よ破船よ海よ月夜よ

ともすれば酒に遁るるあさはかの吾を棄てむと思ひ立ちける

逃亡

東京の秋の夜半にわかれ來ぬ仁丹の灯よさらばさらばと

淺草の鳩も寂しく思ふらむ日頃見馴れしわれを見ぬため

うつくしき夜の色こそ忘られねああ東京よすこやかにあれ

秋の風馬樂ふたたび狂へりと云ふ噂などつたへ來るかな

女みなみにくく見ゆるかなしみか酒みなにがくなりし歎きか

老耄れし新内ながし過ぎゆきぬ避暑地の街の秋のゆふぐれ

東京よひとり思へば蒼ざめし女のごとき汝が顔も見ゆ

宗演はなほすこやかにわれを見て笑ひたまひぬ戀はいかにと

酒にがく女みにくしこのごろは心しきりに獅子窟にゆく

秋の日はいづこもおなじ神田なる琅玕洞も寂しかるらむ

いまごろは紫朝は何をうたふらむそれのみ夜ごと思ふかなしさ

凡骨もすこやかなりやなほ刀を忘れて酒をたうべありくや

海を見てしばし愁ひを忘れけりいとあはれなる逃亡の子は

いたましき小土佐の顔を思ふ夜も秋はさすがに多かりしかな

逃亡かただかりそめの厭世かとまれふたたび東京を見じ

さあれ猶ひそかにわれはおとづれぬ銀座歩めば涙忘るると

かなしくも東京を棄て君を棄てわれとわが身を棄てにけらしな

そはなほも昨夜のごとくに思はるる都大路のありあけの月

かなしみに堪へで逃げたる吾なりきかの君をのみなどか恨まむ

なつかしき人形町の夜の靄はなほやはらかく君をつつむや

日本橋のうつりかはりも悲しかりわが身の上に思ひくらべて

雪降ればあはれ小せんが脊髄の痛みいかにと思はるるかな

玉を突く人もなきまであらけたる避暑地の冬もあはれならずや

しみじみと寫樂の繪よりあぢはひしかなしみにこそ身をまかせけれ

由井が濱藻屑もわれを歎かしむ君が黒髪まじりぬるかと

死ねと云はば死にもやすらむかかる夜のかかる心の亂れし時は

秋と冬

廣重の海のいろよりややうすしわがこの頃のかなしみのいろ

秋の日の寂しき時はただひとり停車場に
往き人をながむる

よく愁へよく涙ぐむかの君を秋の女と名
づけけるかな

海に入り死なむと書きし君が文われにと
どきて秋は來にけり

あらそひは秋のことより始まりぬかくて
情無のことに及びぬ

海草の赤き實多くながれ寄る濱なつかし
や君と拾はむ

冬の鳥一群きたるそのむかし君と泣きた
る岩の方より

夏來る

夏來れば君が瞳に解きがたき謎のやうな
る光さへ見ゆ

たはれをとわれを罵る人多く夏もかなし
くなりにけるかな

このごろは日毎銀座をおとづれぬ青柳も
よし舖石もよし

朝おもふことも夕はうらぎりぬかかる子
にこそかなしみはあれ

浴泉記

何ごとかののしる馭者の濁聲もかなしく
馬車は朝霧に入る

浴泉記書かばやとしも思ふかなかなしき
ことの胸にあまれば

ただひとり湯河原に來てすでに亡き獨歩
を思ふ秋のゆふぐれ

泣かしめよわれこの谷にかなしみを忘れ
むとして來しにあらねば

鼯鼠の巣ありとわれをあざむきて山に誘ひしかの少女はも

たそがれの湯槽にあれば玻璃窓に黒き猫來てわれを凝視むる

浪花節の梅車かかれり往かずやと女けうとくわれを誘へり

あなけうと山火の灰や降ると云ひ障子をしめぬ君はさびしく

橋の上にひとりたたずみ秋の日の羽蟲の群をはかなかるかな

山火見ゆ夜の空あかしかかる時ひとしほ切に君をおもほゆ

冬ちかしかの遠山の頂にはかなきほどの白雪もがな

紅燈行

紅燈の巷にゆきてかへらざる人をまことのわれと思ふや

夏ゆきぬ目にかなしくも殘れるは君が締めたる麻の葉の帶

酸漿はやがて鳴らずもなりぬべしあまりにわれを恨みたまへば

かなしくもみづから棄ててあることをさばかり悔ゆるわれと思ふや

君とあればいと微かなる夏の夜の遠いかづちもなまめきにけり

蟲賣はやがて出づらむ去年の秋君と買ひたる鉦たたきはも

やすやすと死を誓ひたる女より秋のあはれを覺えけるかな

その女まばたきの數いと多く秋の灯を見るここちこそすれ

秋風はつれなやこよひつくづくとわれの
凝視(みつ)むる紅燈を吹く

君が帯秋のひびきを立てにけり涙ながら
に結びたまへば

冬來れど水天宮のにぎはひはまだ君ほど
にあらけざりけり

昨日まで

昨日まで何をかなしみうなだれて都のな
かをさまよひし子ぞ

ただひとり都のなかに往き暮れて浪費を
おもふ秋のゆふぐれ

こころよりよろこびこころより愁へ生き
甲斐のあるわれとならしめ

君を棄てわれをも棄てて現身(うつそみ)の何ゆゑに
なほ生きむとすらむ

ふとわれの額(ひたひ)に暗き影さしぬ昨日(きのふ)の夢や
おそひきたりし

ああ銀座こころ浮かれて歩みしもいつか
昨日となりにけるかな

われなりきうなだれて往くわれなりき朝(あさ)
戸出(とで)の子も夕戸出(ゆふどで)の子も

山遠し見るに涙もさしぐまるわがかなし
みはかしこより來る

夜もすがら思ふは昨日うつつなくわれに
もたれし人の身のうへ

わがこころいたく傷つきかへり來ぬうれ
しや家に母おはします

おとづるる人もあらねばわが門は青蓬も
て蔽はれにけり

二　藝人

馬道の馬樂の家へゆく路地に夕月さすとかなしきものか

いやさらに寂しかるらむ馬道の馬樂の家の春も暮るれば

かかる日のいづれ來らむ身なるべし馬樂狂はば狂ふまにまに

春來ともうつくしき夜のつづくとも馬樂醉はずば世はも寂しき

世を棄てて馬樂いしくもありけるよ憂しと思ふは汝ばかりかは

颯然と高座にのぼる汝を見てあなわれかもとうたがふも吾

うつし世をかなしむままにあやぶみぬ紫朝うたはぬ日もや來るかと

ああ紫朝この世をなげく人びとのためにうたひてあるや夜毎に

秋の夜に紫朝を聽けばしみじみとよその戀にも泣かれぬるかな

盲目の紫朝の聲もかなしかり寄席の木戸吹く秋の風かも

第三卷

祇園歌集

祇園双紙

「祇園歌集」は、大正四年十一月、東京市牛込區矢來町の新潮社から出版された。白い和紙の表紙で、金の細い輪廓を取つた中に舞扇と舞姿の額とが金、紅、青などの色彩を使つて印刷してあつた。この繪は竹久夢二氏の描いたものであつて、これ以來私の本の裝幀と云へば、概ね夢二君を煩はすやうになつた。

「祇園双紙」は「祇園歌集」の續篇の如きものであつて、大正六年七月、同じく牛込の新潮社から上梓された。この裝幀には夢二君は鴨川の床を背景にして、千鳥を白く抜いた紅提灯と、その下に彳む阿嬌とを描いた。

祇園歌集

祇園

かにかくに祇園は戀し寢るときも枕の下を水のながるる

伽羅の香がむせぶばかりに匂ひ來る祇園の街のゆきずりもよし

雨降りて祇園の土をむらさきに染むるも春の名殘りなるかな

香煎の匂ひしづかにただよへる祇園はかなしひとり歩めば

にぎやかに都踊りの幕下りしのちの寂しさ誰にかたらむ

ただひとり都踊りの樂屋より拔け出でて來し君をこそ思へ

一力のおあさに聽きしはなしよな身につまさるる戀がたりよな

一力の緣に燕がはこび來し金泥に似る京の土かな

ゆゑ知らず涙ながれぬ閉されし歌舞練場のまへを通れば

あでやかに君がつかへる扇より祇園月夜となりにけらしな

加茂川の水をながめてもの思ふさすらひびとにものな問ひそね

夜もすがら何を恨むや歎けるや加茂川の水かなしげに泣く

加茂川に夕立すなり寢て聽けば雨も皷を打つかとぞ思ふ

大勝の女あるじがふとりたるからだのごとく暑き夏の日

ねむたげの目のまたたきに誘はれて蛾はきたるらし種二の膝に

白き手がつとあらはれて蠟燭の心を切るこそ艶めかしけれ

仁丹の廣告も見ゆ橋も見ゆああまばろしに舞姫も見ゆ

さかづきす岡崎に住む先生の髭なつかしと云へる女に

狼藉と祇園の秋を吹きみだす比叡おろしよ愛宕おろしよ

秋ふかく木がらしに似る風ふけばはやくも痩する加茂川の水

病みあがり吉彌がひとり河岸に出で河原蓬に見入るあはれさ

寂しさに加茂の河原をさまよひて蓬を踏めば君が香ぞする

ゆるやかにだらりの帯の動く時はれがましやと君の云ふとき

三四人そろひて入り來舞ごろも光琳波の金襖かな

かなしみは蓬の香よりきたるなりおれんなゆきそ加茂の河原に

鳥邊野に夜半に往かむと云ふは誰ささやきかはす舞姫のなか

清水の陶器の舖の看板の取り入れどきを君とかへりぬ

圓山の長椅子に凭りてあはれにも娼婦のあそぶ春のゆふぐれ

叱られてかなしきときは圓山に泣きにゆくなりをさな舞姫

叡山の荒法師とも云ひつべきひとと遊びていなづまを見る

舞姫に笑はれながら酒を飲む丹波の客も床にすずみぬ

秋江が闇の怨みを書く時を秋と云ふらむ京の仇し寢

あだ名して樊噲と呼ぶ極道もしみじみとして遊ぶ秋の夜

京さむし鐘の音さへ氷るやと云ひつつ冷えし酒をすすりぬ

南座の幟の音がこころよくわが枕までひびき來る時

先斗町の遊びの家の灯のうつる水なつかしや君とながむる

島原

島原の角屋の塵はなつかしや元祿の塵享保の塵

菜の花の花のさかりや傾城のたましひのごと蝶ひとつ來る

その女東寺の傍に跋など教へゐたるがいづちゆきけむ

洛外

嵐山來は來つれども君あらぬこの寂しさをいかにすべけむ

落柿舍に來てふと思ふ鎌倉の廬子の庵は何と云ふ名ぞ

しめやかに時雨の過ぐる音聽こゆ嵯峨はもさびし君とゆけども

宇治

月夜よし寢じなと云ひし人のため宇治の一夜は忘れがたかり

別れ來し君が身のうへしのびつつ宇治の河原におもひ草摘む

黄檗の寺の鐘の音しんしんと君思はせてねむりかねつも

旅なれば伏見の街の夜半の灯もかなしくひとり京へいそぎぬ

南地

秋の夜の道頓堀のにぎはひのなかにあれどもなぐさまずけり

たそがれの角座の幟はたはたと吾を紅燈の街にさそへり

富田屋の文づかひする下男雨に濡れつつ街をはしるも

祇園双紙

祇園双紙

京に來て菩提心持つ子となりぬ鐘の音にも涙こぼるる

もろともに麥祭を見にゆかむ薄約束の君なりしかな

寄せ書にわが思ふ子の名もありて胸をどるるなり京の繪葉書

寂しければ大徳寺にもゆきて見つ時なぬ雪降るがまにまに

うれしきは君にもあらず遠州が好みの石の置きどころかな

菩提講の札さびしげにかかりたり伽藍人なき春のゆふぐれ

宵の口ただひとときの逢瀬だにうれしきものか京に來ぬれば

秋さむし金のこぼるる舞扇だらりの帶のうしろつきなど

浪華風流

小夜ふけて角の芝居の果太鼓かなしく水にひびき來るとき

筆取りて達磨大師の繪を描きぬ八千代が春の夜のたはむれ

第四卷

黑髮集

仇未練情

「黒髪集」は、大正五年四月、東京市本郷區曙町の千章館から上梓された。裝幀は竹久夢二君で、表紙には兩手で面を蔽ふた髪の長い裸女、口繪には黒い着物に紫の頭巾をした女が描いてあつた。

「仇情」は、おなじく大正五年四月、東京市京橋區柳町の通一舎から出した小形歌集で、紫色の表紙には、吉の字髪が金色に捺されてあつた。

「未練」は、大正五年五月、東京市麻布區阪下町の阿爾陀書房から出版された。歌麿の「みれん」と題する版畫を表紙にして、裏には清元の唄本中「みれん」の文字あるところを用ゐた。

黒髪集

國貞描く

やすやすと戀もいのちもあきらむる江戸育ちより悲しきはなし

わがお三輪な見そと言ひて頬を染めし鬢下地のひとも忘れず

通り魔にふと逢びしゆゑ君が家をおとづれざりき恨みたまふな

やるせなさそれもはかなきなぐさめに黄楊の横櫛すればなるべし

清元の稽古もさがる日となれば女ごころの悲しからまし

よく似合ふ君がこのみの黒襟に秋の風吹くゆふべとなりぬ

見ぬ戀

うつらうつら君が家のあるあたりまでわれ來しものか見まく欲しさに

大雪の深夜の街をゆきたるも見ぬ戀ゆゑとをかしかりけり

何ごとに病めると問ふやわれ答ふいともはかなき見ぬ戀に病む

芝居小景

幕閉ぢぬ君はうるみし目を上げてかすかに言ひぬあはれならずや

いつのまに舞臺のお露わが傍に來しやとばかり君をおもひし

かくばかり美しき戀今ありや君と見ざるが惜しき幕かな

逢ふごとに東の七にゐるひとよこれも機緣のひとつなるらむ

男なればいつまで歎きかなしまむ荒事を見て戀をわするる

君あらぬ今日の棧敷の寂しさは知らぬ他國に來しここちする

いつの日の芝居の夢のなごりかも十六夜も見ゆ清心も見ゆ

二情人

薄なさけ深なさけはたいづれぞや二人がなさけくらべ見る時

秋來れば二人かたみによく泣きぬつれなしと言ひうらめしと言ひ

昨夜踏みし女とこよひ踏む君とことなる秋の夜の草かな

身はひとつ心はふたつわが戀はこの合ひがたき理より破れむ

一人は死なむと言ひぬ一人は生きむと言ひぬいかにしてまし

戀無常

むつまじく語りてゐれど何ごとを企みゐるらむ心ごころに

「夜もなほ眠らず何を書きたまふ」「君と死ぬべく書置を書く」

みな戀のかたちを變へし姿なり君を憎むも君をのろふも

やがてまたもとの一人にかへるらむひとり寂しく墓にゆくらむ

おなじ世に君あることを憂しとする日の近からむことを怖るる

かくならむ戀とも知らず頼みたる君をあはれむわれをあはれむ

或るひとの或る夜の假の情ゆゑわれ墮ちにきとひとに語るな

あはれなる君よとひとりつぶやきぬ世にも悲しき戀の終りに

深なさけ

君は言ふかばかり思ひ思はるる戀に暇のありとおもふや

深なさけ仇なさけよりすこしよし薄なさけには及びがたかり

よしえやし海の深さははかるともなさけの深さいかにはからむ

死ぬばかり君を思ふといふ言葉いくたび言へば許したまふや

一夜

今もなほわが目のまへに閃きぬ君にわかれし夜半の稲妻

百夜をば一夜にちぢめ一夜をばこのたまゆらにちぢめたる戀

悲しやと耳のほとりに來て言ひぬ君やささやく夜やささやく

夜の雲月の出しほか遠火事かほのかにあかくものの戀しき

しづかなる夜なりき君がおくれ毛をもてあそぶほどの風はあれども

秋の夜やまた泣きに來るひとのある前ぶれのごとこほろぎの鳴く

祇園拾遺

冬の夜の凍てし鼓をあぶる手の痩せしもあはれ誰を戀ふらむ

うつくしき僧とをさなき舞姫の戀がたりなど悲しかりにし

次の間に君の脫ぎたる舞ごろもありてなまめく夜半なりしかな

打たるるもよしや玉手に抱かるる君が鼓とならましものを

舞ごろも取り出しては泣くといふ病みたるひとの文もとどきぬ

誘惑

世を厭ふごとき顏して三年經ぬこのあはれなるいつはりびとよ

かの君に寂しき顏を見せたるが不覺のもとと知らざりしかな

戀知らず情知らずと言はるるが何わかうどのうれしからむや

紅燈に誘はれたるは昨日なり今日はた何に誘はれにけむ

鎌倉歌

鎌倉は淨土にかあらむわれのみか釋宗演も冬ごもりせり

君を見じつれなきひとを見じとしてまた鎌倉に冬ごもりする

かはりしはわればかりかは砂山も幾冬經ぬれかたち變りて

夜もすがらとどろとどろと鳴る海の音ばかりかは夢を破るは

思ひわび恨みわびたるいやはてのわびすまひとは知る人もなき

續鎌倉歌

鎌倉の七つの谷の谷隈のかなしきわれの冬ごもりかも

たはれをのたはれ事にも倦き果てて鎌倉淨土戀ふるなりけり

はなやかに日を送りたる身にとりて浪の音ばかり悲しきはなし

君が家の犬を牽ぬし朝戸出もいつかむかしとなりにけらずや

煙見ゆ野を燒くけむり遠く見ゆ煙のごとくはかな吾妹子

戀も憂し人の情も腹立たしひとりかもねむひとりかも寢む

夜となればひとり夜戸出をすることもこの頃知りしなぐさめにして

置きてゆくひとは誰が子ぞ朝ごとにわが門にある朝顔の花

夏過ぎて戀をたのまずなりし子の歌あはれなり朝顔のごと

鎌倉や海のかよひ路いちめんに撫子となる夏もちかづく

君が帶くれなゐなるが夜目に見ゆ貝細工屋に海の風吹き

鎌倉の戀を語ればひと笑ふさばかり戀はをかしきものか

あけがたのつめたき砂を踏むこともものの哀れを知ればなりけり

濱涼み戀になやむといふ君が夏瘦もせでおはすをかしさ

長谷寺（はせでら）のすずしき鐘の音とともに朝戸出するも夕戸出するも

世にそむき君にそむきてわれひとりいきどほろしく向日葵を植う

わが家に君來ずなれば冬がまへはやくもするや鎌倉の里

仇情

仇なさけ

日に夜にいくたび變るこころぞそよかぜとなり稻妻となり

あざけりぬわれを試さむ謀りごと女の智惠のあさましさなど

いざさらば君は君とてもの思へわれはわれとてものを思はむ

はや褪せぬくちびるのいろ髪のいろ心のいろは見ねば知らざり

冷笑もうつくしき子がする時はいとすさまじきここちこそすれ

うつくしさ取りかへさむと企みある女を笑ふ秋の風かな

西鶴の一代女讀みしとき思ひあたりし君にやはあらぬ

なにがしといへる遊女のはてに似るこのあはれなる秋の女よ

もてあそぶ心にあらずわがこころ弄ばるる心なるらし

謀叛をば企みあるとは知らざらむ一尺ばかり君を離れて

いとせめて戀の歌などつくらずばわが世はいかに寂しからまし

なまなかの人の情にほだされてあらばあるべきわが身ならむや

湘南哀歌

鎌倉の夜のつれづれの棄て書も君が名ありて破れかねつつ

いそのかみ金槐集の作者ゐしところに住みて君を思ひぬ

夜となれば海も眠りぬわれも寐む海もわがごと悲しからまし

鎌倉に獅子王文庫いまはなしわれのこころに君なきがごと

かなしみに追はれてまたもさすらひの旅に出でゆく吾をあはれめ

秘事二三

寂しさに空をながめて思へらく雲にてもよし慰めに來よ

五六度讀みかへせども戀しやと言ふ文字見えず寂しかりけれ

秋風は白く鏡にうつりぬとすさまじきことと書ける文かな

相思

戀しやと言へば君また戀しやと言ひぬあたかも山彦のごと

かくばかり思はれ思ふ戀をするこの人の子ははやく死ぬらし

今日あらば明日も明後日もその後の日もえうなしと思ふ二人ぞ

わが吐息君が吐息に觸るるときはじめてそこに秋風を生む

いついかにいづこいかなるところにてわれやはじめて君を見にけむ

うつくしきものの譬喩に君を引き悲しきもののたとへにも引く

君を見じつれなき人を見じと言ふ文はおこせど逢へば逢ひぬる

わがこころ悶へ煩ふみなもとをそのみなもとの君に問はれぬ

ほほ笑みぬやがて微かにうなづきぬとのみに後のことは忘れぬ

あさましや心はやくも汚したり玉のやうなる君がからだを

つれなしと口癖のごと言ふ君は知らずおのれのつれなきことを

戀はただひとつわが君ただ一人(ひとり)殘りはものの影と見たまへ

待てど來ずさびしくかへるあぢきなさ摘み盡くしたる秋の花かな

破れたる戀の痛みもかねて知る現身(うつそみ)なればば歎かざらめや

いつよりか君を思ひしふとわれはこの不可思議に思ひあたりぬ

うつそみはなほ漂ひてあるごとし心はすでにゆくへ知らずも

末の世の濁れるもののただなかに君おはすこそ危うかりけれ

未練

未練

いささかの未練はのこれ野晒（のざらし）となる身の
はての何を思はむ

な忘れそ時には思ひ出でよなど未練がましきことも言ひぬる

生死（いきし）もともにせましと誓ひたる言葉もいつか忘れられつつ

淺草はふるさとよりもなつかしきところと言ひぬ未練がましく

涙落つ君を恨むやみづからを歎くや何のゆゑもあらぬや

夜となれば昨日は君を捲きし手を枕にしつつもの思ひする

戀愛三昧

死ぬばかり君を戀しと思へどもまた或る時は刺さむとぞ思ふ

妬まれて虐（しひた）げられて恨まれてながらふべしやわれの命も

そは君がありのすさびのつれづれに弄びたる戀にやはあらぬ

恨みごと少しまじへて書く文のたどたどしきもあはれなるかな

薩摩升（さつましょう）は旅ゆき荷風（かふう）世をのがれわれのみひとり人を戀ふるや

思ひ寐に昨日は寐ねぬ今日はまた悲しさあまる恨み寐に寐む

わが膝に泣きくづるれば簪（かんざし）もあなやはかなくゆらめくものか

音立てて君が横櫛落つるときはじめて秋と思はれしかな

うつくしき死方などを語り合ひ悲しく笑みし夜半を忘れず

夏ちかし廂の葉の帯空解けてあなしどけなと言ひし子おもほゆ

かの夜半の君が空寝の姿など思ひもかけず目に浮び來る

目を閉ぢて頬に頬寄すればうつつなし三年四とせはいつか過ぎぬる

新弄齋

よしやかの弄齋ならね君がためつくりしわれの歌もきふらふ

しら玉の君はわれゆゑ身が細るわれは君ゆゑいのちが細る

さらさらに名を立てじとは思へども詮なやその名おのづから立つ

戀知らず情知らずのうきひとは三味線堀の秋に棄てばや

戀ざめ

まづひとり吐息をつきぬわが戀はその吐息より覺めにけらしな

戀ざめの男よあはれ秋風に吹かれて今日も何處さまよふ

朝顔の名殘りの花の咲く家に戀ざめびとはひとり嘘る

あだびと

やうやくに心落ちゐぬつくづくと思へば君も恨みがたかり

雨降れば隠亡堀のにごり水君が家さしてゆくとかなしき

時ありてふたたびわれにかへり來る君と信じてうたがはぬかも

おもひで

いつの日のおもひでならむ黒襟と黄楊の横櫛まぼろしに見ゆ

昨日をばいくつ數へて忘れえぬかの日となるや知らば教へよ

浴泉秘事

夜は深しかつては蘆花も聽きにけむ慈悲心鳥の鳴く音聽こゆる

君は湯に山うぐひすは山の巢にわれは夜床にものを思へる

西鶴のものがたりにもはや倦みて君を思ひぬ雨の日ぐらし

來よといふ君が文よりまたしてもわが世の秘密ひとつつくりぬ

時ならぬ杜鵑のこゑす湯の宿のおそろしき夜の冬のあけがた

うたがひ

うたがへば果てなく君のうたがはるうたがひ死に死ぬかとばかりに

おのづから差櫛折るる日ありともわれの心をうたがふなゆめ

深く戀へばいよいよ深くうたがはるはてなく君をうたがふも戀

やごとなき戀人なればはしたなきものうたがひはすまじきものぞ

ただひとつ胸に殘りしうたがひのために
破るる繻と知らずも

やはらかに君の心をうるほはすうたがひ
ならばするもよからむ

うたがひもほのかに胸に來るときは沈丁
花など嗅ぐここちする

わかれ

黑襟は君にふさはじかく言ひし言葉のた
めに別れたまふや

また君と逢ふときあらぬここちして昨日
も別れ今日もわかるる

戀びとのつれづれならむともすれば君の
持ち出すわかれ話も

別れむとまづ言ひたるは君なりきとりと
めもなき爭ひの後

後の日もその後の日もかはらじと誓ひし
君の別れむと言ふ

紅燈拾遺

繻といふもののあはれを知るひとのおと
しめらるる世にも生れぬ

いつはりに涙は落つるものかはとまたし
ても君はいつはりを言ふ

紅燈の巷に生れあきらめのかなしみを知
る君なりしかな

君といへばまづ思ひ出づいつぞやの勢獅
子よりうれしきはなし

消息

われを責めわれをのろふと書きし文一夜
のうちに蛇となる

第五巻

毒うつぎ

河原蓬

尋(ひん)あまり何を書きけむ懸しやといふ文字(もじ)のみは目に殘れども

「毒うつぎ」は、大正七年五月、東京市芝區新堀町の南光書院から出版された。裝幀は橋口五葉氏の筆に成り、紫陽花と鶺鴒とを模樣風に描いた美しいものであつた。歌集叢書第一篇としてあるところを見ると、他にもこれと同じ體裁の本が出たのかも知れない。

「河原蓬」は、大正九年八月に、東京日本橋區通四丁目の春陽堂から上梓された。裝幀は竹久夢二君であるが、これは青地に蓬の葉を白く拔いた圖案風のもので、見返しにも同じ模樣が使つてあつた。

毒うつぎ

筑紫の旅

いにしへの防人(さきもり)たちも筑紫路に來て嬬(つま)を戀ふ歌をうたへり

かにかくに君は遠しと思へばかうたた寂しき旅もするかな

不知火の筑紫の海の遠鳴もなつかしければはるばると來つ

京戀し

はかな言(ごと)云ふ舞姫の手にありて螢の光いよよ青しも

夏痩か戀のやつれか昨日今日わが舞姫は何のおとろへ

人や見む比叡おろしや寒からむ障子閉めむと言ひにけらずや

祭過ぎ大文字過ぎ夏もゆくいとあわただし京の暦は

浪華のひと

遠くゐて浪華を思ふこころよりこのはかなさは湧けるならぬか

病みぬれば浪華のひとの夢も見つ秋のあしたに目覚めけるかも

君が文座摩の御祓のあくる日と書きし日附もなつかしきかな

伊勢の巻

鈴の屋の鈴はかしこしわが家の戀の文がらかしこきがごと

馬樂追憶

狂ほしき馬樂のこころやがてこのもの狂ほしきわがこころかな

たまきはる命ふたたびよみがへれ馬樂の命いとほしきかも

蛇の茂兵衛といへる男のものがたり馬樂はしたりその夜忘れず

氣のふれし落語家ひとりありにけり命死ぬまで酒飲みにけり

淺草や觀音堂に月させど馬樂を見ざる三年なるかな

ありし世のありのことごとしのびつつ馬樂地藏に酒たてまつる

蠟燭を細くともせし枕もと馬樂病む夜のまぼろしも見ゆ

淺草は秋公孫樹葉の散るところむかし馬
樂の住みけるところ

三日月は黄楊の櫛より細かりき馬樂を訪
ひし夜のおもひで

煩惱地獄

悲しければ星に向ひて走りたりわれ死な
むとす走らざらめや

何なれば悲しきひとを責めにけむ責めて
は何にひとり泣きけむ

わがいのち

世を厭ひみづから殺す日を待てるこの現
身のいとほしきかな

ままならぬ人の世ゆゑにあぢきなう別れ
し君のいとほしきかな

年老いて不孝の子をば持ちたまふわが父
母のいとほしきかな

誰が子かもて來て臭れし水仙の花の小さ
きもいとほしきかな

われを見て嘲けるごとく笑ひゐる寫樂の
繪さへいとほしきかな

ふと傍の句集を讀めばいにしへの太祇の
句さへいとほしきかな

河原蓬

河原蓬

はるばると京を思へばほのかなる蓬の香さへ夢に入るかな

山鉾の宵の飾のにぎはひのなかにわれあり君と見るべく

上加茂の水無月能もいつか過ぎ君と見るべき京の夏來ぬ

一力のはなやかさよりこの秋はかの落柿舎の寂しさにゐむ

年ごとにまさる寂しさ太祇忌もいつしか過ぎて京の秋來ぬ

比叡おろし今日もまた吹く舞妓の戀破れよといふがごとくに

秋の思

秋の夜はものぞなつかし夜毎ゆく銀座通りの好きありきかな

寂しさに好きありきするならはしも秋がつくりしならはしにして

人戀し灯もなつかしと夜戸出する寂しきころを秋と言ふらむ

かかる夜の霧にまぎれてたたくべき美しき灯のさす窓もがな

秋の夜の霧の大路を走りたり夢おほく見てものに狂へる

秋の夜もにはかに更けし心地しぬいまはたおそき悔のかへりみ

桐の花實となるころの雨なれば太祇の句など讀みて聽くべし

何ゆゑに乗てたまひしと言ふごとく秋の
風來てさめざめと泣く

浴泉記

雨を見る雨にけぶれる山を見るかくてはかなく君が文見る

山見れば山に雪あり しかすがにわれに愁のなからめや冬

鎌倉哀歌

鎌倉の七つの谷の秋ふかし君のふるさとわれのふるさと

夜をこめて伊豆の山火は燃ゆといふわれも夜すがら君を思はむ

砂山にわれらがつけし足跡もむなしく消えて幾年か經し

冬の日はつめたくさしぬ砂山は墓のごとくに靜かなるかな

うき戀のなれの果かとあざけるやわが鎌倉のひとり住居を

戲場小景

夜となりて二番目の幕開くころのそぞろ心を何にたとへむ

棒しばり縛られながらよく踊る太郎冠者よな次郎冠者よな

合邦がしどろもどろの鉦の音は人間の苦をかたる鉦の音

夢見るひと

人の世の旅のなかばもはや過ぎぬ戀二つ三つ失ひし間に

第六巻

鸚鵡石
悪の華

ただひとり旅に出づるもわかき日の見果
てぬ夢のつづきなるべき

人の世を源氏の君も厭ひにきわれの厭ふ
をとがめたまふな

葛飾の紫煙草舎の夕けむりひとすぢ靡く
あはれひとすぢ

「鸚鵡石」も「悪の華」も、ともに演劇に關する歌のみを收めた、著者の歌集中では異色のあるものである。

「鸚鵡石」は、大正七年十月、東京市芝公園の玄文社から出版された。裝幀は竹久夢二君で、三人の歌妓の舞踊を南蠻人らしきものが見てゐる圖柄が描いてある。隅に書いてある文字を見ると「都風流大をどり」

「悪の華」は、昭和二年二月、歌舞伎座出版部の發行にかかるもの。裝幀はやはり夢二君であつて、卷頭には「この集を松蔭市川左團次君におくる」としてある。

鸚鵡石

芝居十二景

にぎやかに幕の開くときわれにのみなどかはかかる寂しさの來る

序幕よりはやくも泣きぬ惜しからぬ涙を君は持てるものかな

魚がしの幕に斜めに夕日さしこの幕間のしづかなるかも

幕間のみじかき逢瀬はかなしといふ文きたるあくる朝かな

舞臺と棧敷

芝居見て胸のしづまるものならば泣きね歎きね涙ながしね

ともすれば涙をながすうき癖も芝居に得たる病なるべし

誰か知るわが世短きかなしみを一幕物の淡き愁ひを

赤面に白髪のかつら大跨に舞臺のうへを練るは誰が子ぞ

うつくしき夢にわれらを誘ふごと延壽太夫の聲の聽こゆる

清元のかなしき聲はわが胸の幾年までへの傷あとに染む

戀や死や默阿彌ものを見るときは因果の法をなみしかねつも

おもひで

芝居見にはじめてゆきしいとけなき日のおもひでの鷄頭の咲く

自雷也の夢を幾夜か見たりけむ不思議を知りしをさな心に

ゆく春の名殘りを惜しみ歌舞伎座のまへを通りぬひとり寂しく

わが友の旅の役者のものがたり讀みてさびしく秋の夜は寢む

鸚鵡石

うつつなくものを思ひぬ幕開きて意休の髯のながき春の日

しんしんと雪の降る夜に圖藏の仁木を照らす面あかりかな

夜叉王が鑿のにほひもなつかしや舞臺のうへの女を思へば

悪の華

俊寛

さながらに餓鬼のすがたや左團次の俊寛
のこゑ胸にせまるも

われもかく人をのろひし日もありき俊寛
を見て涙わりなし

俊寛の胸のなげきをさながらに山鳴ぞす
る海鳴ぞする

俊寛の身には藻草も生ひぬべし人をのろ
へば石となりぬる

あさましく生きむがために爭へる人ごこ
ろ見てわれも寂しき

蟹のごとよろぼひ匐ひぬ俊寛もあはれ餓
ゑては岩を食ふや

迦具土の火燃ゆる島の流人には俊寛よ
りもわれやふさはむ

棧敷まで鬼界が島となりぬるや幕閉づれ
ども浪の音して

幕閉ぢてしばしがほどは怖ろしき人の心
にをののきて居り

第一の世界

——小山内薫氏に——

世を厭ひ世と隔たりて住むひとをわれの
外にも見るが悲しさ

閉されし扉は開かれぬうそ寒き悲劇の風
はここよりぞ吹く

ものなべて果敢なき時は左團次の摺る燐
寸の火もあはれなるかな

窓の外の夕日あかるし客去りて幕切れの
鶏くくと啼くとき

芝居雙陸

あはれなるお三輪の戀に涙落つすこし身
に染むことあるがため
幕開けば夢見るごとくゆらめきぬ巖太夫
のまへの蠟の灯
芝居見る心はをかし舞臺なる時賴法師も
われとおもへり
松莚の荒法師にも似たる友ありき高野に
往きてかへらず
つと入れば棧敷人なく花道を喜撰をどけ
て出で來るところ
しみじみと涙をながす宗岸のきんか天窓
に秋の風吹く
舞臺にて大杯を乾すひとよ汝もわがごと
世をば嗔るや

344578

わが友に似たり素襖に醉ひ痴れてたんな
たりやと踊る男は
うばたまの髭黒々の九郎兵衛はすつぱな
がらもいしく踊れる
深川の夏のけしきとなりにけり閻魔堂橋
に夜の雨降り
陸奥と聽けばをかしきわれなれや芝居を
見つつ旅を思へる
袖萩と袖萩の子に雪降りて舞臺はかなく
たそがるるころ
幕切の鐘の音かなしそのむかし京にて聽
きし鐘の音に似て
松助の皺嗄れ聲にさそはれて雪は降り來
るものと思ひぬ
春の風ふたつの獅子を吹きて來ぬ赤がし
らよな白がしらよな

第七巻

夜の心

鸚鵡杯

傀儡抄

たまきはる命を持たぬ人形も文五郎の手にあれば生きぬる

古靱（こうつぼ）のかなしき聲にさそはれて蠟涙（ろうるい）しとど流れぬるかな

ここ過ぎていづこに往くや清六（せいろく）の撥のひびきに似たる夕立

「夜の心」は、大正十三年六月、大阪市東區谷町五丁目のプラトン社から出版された。裝幀は白い和紙に、雪洞を黒く、その光を金で描いたもので、清新にして雅致があつた。本文も全部朱の輪廓が取つてあつて、裝幀との調和がひどくよかつた。

「鸚鵡杯」は、昭和五年四月に、東京市京橋區銀座六丁目の太白社から上梓されたもので、表紙は有島生馬氏の裝幀にかかり、綠色の布に山茶花の花だけを白く染め抜いたものであつた。

夜の心

自畫像

この額ただ拳銃の銃口を當つるにふさふところなるべき

現身の寂しさに胸いたむころ額の皺も深みゆくころ

うなだれて額に手をば當つれども懺悔の心などか起らぬ

わが額を縱に刻める皺ひとつかなしき戀をいまも語れる

いくたりの忘れぬひとをうつしけむ瞳か知らね今日も曇れる

幾とせのわがかなしみをたたへたる瞳の深さ君よはかりね

この瞳また澄ますべきよしもがなよしもがなとて歎きくらすも

われを見てあなけうとしの阿闍梨顔往ねと云ふひとあるが寂しき

鸚鵡杯

しみじみと見ればかなしき酒のいろわれの心のいろやうつれる

酒に酔ふ否かなしみに酔ふといふ爭ひをかし果てしなければ

末法の世を歎きわび今日もまたいきどほろしく酒に走るも

いにしへの萬葉集の歌びとも酒を讃へぬわれもたたへむ

まぼろしに須彌山も見るおもしろさこよひも酒をたたへあかすも

大跨に銀座通りを歩むときわれも酒場の猛者かとぞ思ふ

懺法

ことごとく五つの戒を破りたる身も秋來ればしぬながしぬ

女らの空涙とはことかはり熱くも頬をつたひぬるかな

浪華なる與兵衛といへる極道がしたることをもわがごとく云ふ

祇園帖

秋江が戀ふる女のみだれ髪にも似るものか京の柳は

ややありて寂しさ湧きぬ今もなほかはらぬ加茂の水の音かな

たとふれば君の心の寒さにも似たりと云
はむ京の夜寒を

懺悔行

旅に死ぬわが身のはてを思ひつつ野ざら
し紀行讀めばかなしも

君を得すただ寂しさを得しといふ人あり
旅に出づと云ひける

あなをかし旅にて得たる寂しさも遊びの
はての寂しさに似る

夕されば狩場明神あらはれむ山深うして
犬のこゑする

南山の雲より遠く北山の雨よりさむき君
とこそ思へ

秋江が去年の高野の消息に書ける霧よな
書ける雲よな

これを見て懺悔の歌をつくらむと机の上
にまづ獨鈷を置く

わが墓のまへに來て泣く人もなき寂しき
死後のさまも思ひぬ

いつはりの世を厭へばかこのごろは太祇
の句にも親しみにけり

或る女

戀知らず情知らずのかのひとは卑し首陀
羅の娘なるべし

やや似ると君をおもひぬ西鶴の好色庵の
女あるじに

君に問ふ如月ごろの比叡おろしよりも寒
きは誰のこころぞ

夜の心

夜はくだつしんしんとして迫り來るこの
寂しさが命けづるや

わが胸のうちにも浪の音聽こゆ暗くさびしき海やあるらむ

長崎紀行

長崎に來てはや三年經ぬといふ狂人守の
茂吉かなしも

病みあがりなれど茂吉は酒酌みてしばしば舌を吐きにけるかも

赤寺の沙門卽非の額にさす夕日はかなし
人ひとりゆく

長崎に來れば忘れむかなしみか丸山ゆけば消えむ愁ひか

丸山の遊女がすなる夕繪踏白き足よりたそがれにけり

ぎやまんの大杯を手に取れば寬濶ごころおさへかねつも

凧揚げの猛者と聽こえて逞ましやわが長崎の君の兄者人

寂しきは南京街のたそがれにふとしも見たる金絲雀の籠

なつかしやそのころ讀みし長崎のことを書きたる荷風の文も

白秋とともに泊りし天草の大江の宿は伴天連の宿

修善寺遊草

修善寺のわが消息に封じやる野菊の花もあはれなるかな

もの思ひしばしつづけてゐるほどに死を思ひゐぬ湯にか入らまし

寒檠荘雑詠

狂ほしきことのみ思ひつづくれば或る夜
はをかし灯とももの云ふ

如月の秩父颪の音を聴き比叡おろしかと
うたがふもわれ

空遠く秩父の山の雪見えてわが思ふこと
すこし寂しき

凩の音はけうとし世を挙げてわれをあざ
ける聲にかも似る

獅子もその窟にあらば眠るべしわれのわ
が家にあるがごとくに

鸚鵡杯

薔薇その他

かの君の言葉のなかにある刺は薔薇の刺
より痛かりしかな

ほのかなる薔薇のにほひのなかにゐて死
を思ふより樂しきはなし

まづ思ひ出づるは君が手にあらずむかし
紫朝が撥を持てる手

狂ほしく馬樂手を振りものを云ふ姿も見
せぬ夜のまぼろし

そのかみの浪華あたりのさすらひの旅ご
こちもて秋風を聽く

みづからを嘲けるおもひ起りたり秋のゆ
ふべのもののまぎれに

寂しきは人ばかりかは秋來れば風も歎けり雲もなげけり

秋來れば紅蓮の翁の古給など目にうかび酔ひがたきかな

そのむかし市井無頼のなかにゐて流しし涙忘れかねつも

今日もまた空しく過ぐとかこちつつ秋風を聽く秋空を見る

わが墓の立てるをひとり見てありぬ寂しき夢を見たるものかな

眈々亭雜詠

ただひとり生れはたまたただひとり死ぬを寂しと思はざらめや

死は寂ししかはあれどもうつし世に生きてあるほど寂しきはなし

遠き世のよその戀とも思はるるばかり時經ぬ夢と思はむ

窓を閉づひとり寂しく窓を閉づうき世の風の入るを厭へば

かにかくに世をすね人がもの思ふあかつきの窓たそがれの窓

願はくばひとりわがゐるうつし世のこの地獄よりはやく出でしめ

戀のごとこころ躍らすものありやわれの往くべき道のゆくてに

かにかくに相模の國の田舎酒酌みておもひぬ亡き友のこと

師走來ぬ思ふはむかし落語家の小せんの家の年の瀬の酒

師走空ながめてひとり淺草をさまよひしころも戀しかりけり

酒に酔ひ世をののしりてあるもよしとまれかくまれ年はゆくらむ

落魄のうちに死にたる友のことふと思はるる師走月來ぬ

われすでに四十路を過ぎて思ふことやうやく寂し春は來れども

石なれば馬樂地藏はもの言はず寂しき春を誰とかたらむ

酒みづき

杯を棄てて起つべき時いまだ來ずやと思ふ年ごとにして

凡骨が袂に鳴らす銀錢に酒のさむさを思ひ知るころ

杯のなかに地獄はありきとよわれの噉つべき孤獨地獄は

杯とわりなきことを語りたるもの狂ほしき夜もありしかな

旅愁

いつまでもさすらひ癖のぬけやらぬ身こそあはれと思ひ初めしか

寂しさの果を極めむねがひもてはるばる遠き旅をおもへり

わがこころ寂しきゆゑか夏すがた寂しきひとを祇園會に見る

はからずも逢ひし機縁となりしゆゑ祇園祭のおもひでもよし

わが友がうらぶれの身をひそめゐし蹴上の宿はいかになりけむ

白秋が生れしところ柳河の蟹味噌に似しからき戀する

雲仙の島原みちの午さがりかすかに船の笛の聽こゆる

ふるさとの薩摩おもへば涙落つ柑子の山に老いし叔父はも

生友死友

おもひでと云へば鏡花の文にある九つ斛なつかしきかな

斑猫に似しものまへを飛び交ひぬ鏡花を讀みしのちのまぼろし

おもひでのなかに河童の多見次ゐていまもをりをりわれにもの云ふ

梟のこゑか皷を打つ音か鏡花の文を讀めば聽こゆる

その筆もいつしか痩せむ秋江は閨の怨みをまたしても書く

啄木と何をか論じたる後のかの寂しさを旅にもとむる

北海の戀を語りて涙ぐむ啄木の顔をわすれかねつも

牧水も逝きて今年の秋さびし旅にゆけども酒に醉へども

杯をまへに置きつついつとなく牧水の死をかなしみてゐし

口惡の紅蓮の翁のざれ言もいまはふたたび聽くよしもなし

第八卷

人間經

「人間經」は、昭和九年十月、京都市中京區二條通河原町の政經書院から出版された。表紙は白い絹に薄墨色の雲形を置いたもので、小栗美二氏の裝幀に成つたものであつた。挿畫は「林間閑吟圖」を卷頭に、佐渡の風景二葉を小杉放庵氏が幽玄な筆致で描いて與れた。この歌集のはじめには、「吉井勇に寄す」と題する、佐藤春夫氏の詩を載せてあるからその一節をここに引いて歷かう。

若き命をうたひては
若きわれらをよろこばせ
今また老の近き日に
歌聲頓に變りたる
君が歌こそいみじけれ
われはた老の近き身に

人間經

卷一 相模野の庵にありて詠みける歌

その一

ひとり生きひとり往かむと思ふかなさばかり猛きわれならなくに

懷に錢の乏しきそれもよしこころの貧をいかにせましな

家にあれどなほ旅にあるここちしぬわが綻びを縫ふひともなく

いとけなき日の滋來て訴へ泣く夢に目覺めぬ秋の夜の二時

おもひ出づ昔の友の誰彼と酌みたる酒の秋のさむさを

せめてわが一生のうちにただ一度命を賭くる大事あらしめ

世をおげてわれを嘲ける時來とも吾子よ汝のみは父をうとむな

かにかくに無賴の友もなつかしや淺草の夜の酒をおもへば

あめつちの四季の秋には寂あれどこころの秋はただに冷たき

酒みづき無賴たはれをさまざまの名を負はされてわれや來にける

膝抱きて歌をおもふは項垂れて死をおもふより少し樂しき

相模野の林のなかのひとつ家に方違へするごとく來しかな

秋來れば羅漢顏してありぬべし命さびしきことも思はず

その二

相模なる鶴間の里の佗住居ひとりずまひのあはれなるかな

生くること死ぬことなどを思ひゐぬ草木蟲魚よりもはかなく

たまきはる命たまへと言ふひともなくてわが世は生甲斐もなし

ひとりあれば心を刺しに忍び寄る何ものかあり秋の夜更けに

客きたる主人のごとく人の世の秋の寒さをかこち顏して

もの言はず何を思ふや秋の日の寂しき顏をふたつ並べて

かかる時突きつけられし白き刃の秀さきのごときひと言もがな

草と木と風とを友としてあればわが世は
樂し君とあるより

思ふことなべて違ひぬ志やや大にしてせ
んすべもなし

枯葉採り枯枝あつめて火を焚けばゆゑわ
かなくに涙あふれ來

山芋を掘りて呉れたる相模野の鶴間嫗に
つつがあらすな

ひとり讀みひとり思ひてあそことを寂し
けれども樂しとぞする

なまなかに昔おぼえし華奢のため人の知
らざる寂しさに居り

われもまた艶生涯とみづからの傳には書
けどさびしわが世は

十月の八日はわれの生れし日曆を繰らば
惡しき日ならむ

世に出でて風雲の兒とならむより隱れて
歌に生きむとぞ思ふ

おろかなる父もわが子を思ふときとやせ
んかくやせんと煩ふ

世を棄てむ心起せど吾子のこと思へばむ
げに棄てもかねつつ

その三

生死のさかひにありて酌む酒のこの冷た
さは知る人ぞ知る

朝には生きむと願ひ夕には死なむとおも
ふ愚かなるわれ

醉へどなほ寂しきかなや思ふことなすこ
とすべて人にさからふ

何ごとも忘れはてむと思へども杯取れば
醉泣ぞする

わが庭はいたくも荒れぬ零落をかこちながらも酒酌むによし

庭荒れてちちろちちろと蟲鳴けば醉ひつつぞおもふ落魄の歌

あなあはれ二十五年を酒に生き無賴の名さへあまんじて受く

わが床に寢れども旅寢するごとしみづから名づく秋かぜの家

ただひとり夕餉をすると取る箸も虎杖めきてあはれなるかな

秋來れば心するどく尖り來て貫きぬべし君の胸さへ

世之介も老いては世をば寂しみぬわれ秋風を聽くをとがむな

秋いつかわれの心を占めぬらむ身さへ澄みゆくここちするかな

母刀自が老いて寂しく暮らします千駄谷をば思ひやる秋

この夏は吾子も日毎に遊びたる鶴間が原に秋の風吹く

にはかにも阿夫利天狗の風吹き來大山祇よ何を怒るや

孫悟空空を飛ぶやと思はるるばかりはけしく走る夜の雲

世はさびし馬樂地藏をまつる日も秋の曆のなかに加へよ

みな人の命死ぬべき寂しさもますらをわれは塊へて生くべし

つかれたる心をしばし休まする小夜床に似るおん胸もがな

夜の二時に目覺めてものを思ひゐぬ戀をする身にあらなくにわれ

法華經を寫すならねどもの書けば心あまりに澄みてさびしき

燃ゆる時またあるべしとわが胸をいたはりながら秋の夜を寢る

いくたびか燃えたるのちに殘りたる心の灰をいかにせましな

世に出でむことも願はず秋ふかき葎の宿にどひろくを酌む

いささかの濁れる酒といささかの讀むものあれば足るこころかな

道ばたの栗を拾へば高輪の家見え八歳のわが姿見ゆ

酒酌みて世をばののしるわが友の古袷にも吹ける秋かぜ

眞夜中に目覺めて思ふこと多く死にかかはるは何のゆゑぞも

無頼ともたはれをとしも言はば言へ死ぬべきに死ぬことのみは知る

風雲の兒とならばやと思ひたることもむかしの夢なりしかな

冷やかに笑むが習ひとなりにけり叛きそむかれ來しがまにまに

わがこころ劍のごとく冴えて來ぬ何時誰をしも刺さむとすらむ

やりどころなき雄ごころのゆくところ遊俠の徒となりぬべきかな

その四

枯薄あさましき野となりにけり一月あまり旅にねし間に

いきどほりやる方もなく朝ごとに瞰えはらかす霜ばしらかな

みづからの數奇の生を歎くべく習ひおぼえし歌にやはあらぬ

霜見れば年ごとに增す鬢の毛の白きをおもひかなしきろかも

風さむし吾子やいかにと思ひつつ煮ゆるを待ちぬ爐の上の酒

忘られて林のなかにわれ住めば斑猫さへもおとづれぬかな

世に出づるべく阿るを敢てせぬわれはもやがて餓ゑて死ぬべき

現身はいつかは死なむ死なばまた見がたき吾子のいとほしきかな

おほらかに空をながめてありなまし歌を思へる蟲麻呂のごと

友おほくこの世を去りし寂しさにひとりあはれむ命ながきを

その五

相模野に春は來れどもわれはもや家持のごとは妹を思はず

酒の香に名殘り惜しめば春來れどわが家の爐は塞ぎかねつも

醉ひ臥しの相模之介の太腹をゆらら吹き來しごとき春風

くだつ夜の果てしもあらぬもの思ひごと思ひ盡きなばわれは死ぬべし

わびて住む林のなかの庵にも春の日かげはうらうらと射す

今年こそ心の塵を拂はめと蓬生にゐて春日をろがむ

遠山の消え消え雪を見るときはわれの思ひもいつか消え消え

斑猫や道しるべせむ相模なる薄の原のなかのわが家

ひと冬を親しみし廬にわかれけり吾妹子としも別るるがごと

その六

相模野に來て見かへればつくづくとうき世の風の寒かりしかな

われありき叙目に洩れて寢酒酌む相模守のごときここちに

ほの白く胸にのこれるかなしみを心の隅と思ひてしかな

障子紙破れて吹き入る風さむしうき消息やここに張らまし

わが思ひ風に吹かれて飛ぶごとし木の葉のごときものならなくに

かにかくに風雲の兒となるもよし世を棄てびととなるもまたよし

にごりたる酒は酌めども濁りたる世に出づべうも思ほえぬかな

醉死のいきどほり死するときやはじめて君は涙ながさむ

われもまた丈夫なればいきどほること多にあれば醉死もする

その七

末の世のへろへろびとのなかにゐむ吾と思はず旅にこそ往け

相模野や鶴間が原の夏草もわれの心を旅にいざなふ

末の世のへろへろびとは見むもうし旅にい往きて海をこそ見め

旅を思ひ佐渡をおもへば日蓮の袈裟書懸
しくなりにけるかも

一杯の番茶に咽喉をうるほしてまた讀み
つづく日蓮の文

わがこころうち澄ますべくそのかみの師
の一喝に似る聲もがな

みづからを忘れてあれば世は樂し心も遠
く空に遊ぶや

死ぬもよし寂しく生きてあるもよし草木
のごと相模野にねむ

もの言はでひと日二日は過すなり身を草
木と思ひなしつつ

松ばやし櫟の木立すすき原あひだに點す
小さきわが家

朝ごとに慰め顏に緣に來てほろろと鳴く
は何の鳥ぞや

笑ひさへ冷たくなりぬ身もいつか草木のごと枯れしなるべし

夏は來ぬ大山祇よわがために涼しき風を送らせたまへ

相模野に歌ひてあれば吾もやがて法師蟬ともならむとすらむ

野路を馳せ犬と遊ぶを樂しみに日曜ごとに吾子滋來る

犬とともに走れる吾子のうしろ影薄に消えぬ泣かまほしけれ

この次ぎの日曜にまた來むと言ひ滋かへれば夕さびしも

相模なる鶴間の里の夏ごもり朝餉夕餉に吾子しおもほゆ

思ふことやうやく激し相模野の庵に半跏
を組みてあれども

いきどほりやや和まむと野の蚋に血を
食ませつつものをこそ思へ

いきどほりやる方もなく狂ほしく蛾をこ
そ殺せともし火のもと

冷やかに笑みたる後におそひ來るこの寂
しさをいかにせましな

いきどほる心おさへて相模野にわれの寂
しき阿蘭若を置く

相模野の薄のみちをい往きつつひとりあ
はれむ蚋子のいのちを

巻二　おなじく相模野の庵にありて
詠みける歌

その一

爐にちかきうつらうつらのもの思ひ檢校
のごと目をば閉ぢぬれ

世はさむしわが貧しさをまたしても蔑し
めたまふ某の刀自

落魄といふにはあらね人の世を寂しむま
まに落葉松を植う

すくすくと立てる櫟の枝のごと心とがれ
りいかにかはせむ

相模野の薄も枯れぬ阿夫利風土にこそ吹
け霜にこそ吹け

あなかしこ鶴間が原の朝さむみ宇佐伎の
命奠まりたまふ

みづからの恥をおもへば相模野の夜の爐
酒もうまからぬかな

痢を病めどなほ爐のうへに酒を煮ぬ死ぬ
ともよしや恥おほき身は

すさまじき阿夫利颪を聽きながらいきど
ほり酒爐の端に酌む

憤りここだくあれどひややかに默してあ
らむ蟾蜍のごと

酒みづき相模の野邊に野ざらしとなるべ
き身なり醉はしめたまへ

憤ることの寂しさ知るからにわれ相模野
にこがらしを聽く

その二

世を棄てむ生きむ死なむと夜もなほえも
安寢せで思ひ煩ふ

かくばかり恥おほき世にわれやなほ生き
て安けくありと思ふや

ただひとり思ひ惑へばみづからの心の刺
にわれと刺さるる

大山の阿夫利の嶺のしら雪もふたたびか
見むわれと思はず

いささかのことにも涙落つるまでこころ
衰ふやがて死ぬべき

ますらをは涙な見せそ己れをばかくさと
せどもしとど泣かるる

世を棄つる時來ぬあはれ明日よりは貧道
とこそはみづからを呼べ

かくやせむとやせむ思ひ煩へば胸こそ痛
めますらをわれも

ひさかたの空より雨も降らなくにわが頬
はいつか濡れにけるかも

うつしみの恥にこもりてあらむより酔泣
死に死ぬがまされり

末の世の末の末なるさまを見て憤り酒酌
まざらめやも

われ死なむ否々吾子のため生きむかく惑
ひつつ今日も日暮るる

日暮るればひとり寂しくかこつらく落莫
の身は生きてせんなし

玉鉾の道ゆき夕占問ふほどにますらをわ
れも思ひわづらふ

小夜ふけて落葉の音を聽くときはわがか
なしみの散るかとぞ思ふ

またしてもうき世の寒さもたらして四十
路男に冬は來にけり

膝組みて腕拱きてもの思ふことも夜毎と
なりにけるかも

夜ふかく半跏を組みてもの思へばいのち
消ぬがに涙あふれ來

一椀の粥を啜るもなほ生きむさはあれ難
し生くちふことは

もの言はば涙や落ちむ默し居らばこころ
狂はむいかにかはせむ

世を狹みいぶせく籠るわがために羅漢の
講をなさしめたまへ

昨日かも吾子やは言へるちちのみの父の
鬢の毛とみに白しと

ながらへば恥こそつもれかげろふの蟲の
命の美しきろかも

思ひあまり塔へもかねたる息吐けど鶴間
が原の雪消えずけり

斑らはだら鶴間が原に殘りたる雪にかも
似るかなしみかこれ

その三

いそのかみ古りしことごと思ひ出でて命
長きをあはれみにけり

去年の暮に書きしかきおき取う出ては讀
みかへしつつものをこそ思へ

しれびとのいと愚かなるかきおきは落葉
のごとく燒くべかりけり

生けりともなき身のわれや己が家も鼫鼠
の巢と思ひつつぞ居る

歌屑もまじれるごときここちして寂しく
庭の塵塚を燒く

われからの落魄なればおもしろし乏しき
酒錢いかにして得む

いまさらにひとり生くるを悔ゆるほどさ
ばかり弱きわれと思ふや

卷三　さるところに佗住居しける頃詠みける歌

その一

ただひとり机のまへに坐ることひと月に
して冬去りにけり

このままに石となるべきここちしぬ膝を
抱きてものを思へば

こころやや荒しと思ふ夜はひとり自らの
傷を唱へぬるかな

世のひとは嘲みて耳をふたぐべしわれの
心は酒にかたらむ

思ふことあまりに寂しかかる夜は落葉のなかに埋もれて寝む

歌つくることを幸としみづからの寒生涯は數かずもがな

ものなべて忘るる術はなきものかかく思ひつつ日經ぬ月經ぬ

鬢の毛もいよよ白みてうつしみのわが身もいよよ冬さびにけり

人の世はなべて斯かりと思ひつつみづからさとす苦しと思ふな

その二

こののちはいかにか往かむ生死の道をしへませ八ちまたの神

大穴牟遅神が袋を負ひたまふごとくにわれは恥負ひてゆく

夜半に起きてみづからの死を思ひつつ飲む酒なればいとど寒しも

さびしきは夜半の酒ごとわれとわが寒き影にも杯はさせ

小夜ふけて眠られぬままにひとり讀む愚庵の歌はたふとかるかな

相模野のわが庵こひし眠られぬ夜はおもひ出づあはれわが庵

ながき夜を眠らず何を思ふやと問ふひともなくひとりかも寝る

ねむられぬ夜のこころの冴え冴えとあかとき近く猿蓑を讀む

ねむり藥つれなく舌に觸るるなりいや寂しめと言はぬばかりに

巻四　さすらひの旅路にありて詠みける歌

その一

昭和五年八月、わが世の煩ひを忘れむとして、浪速津より遠く四國路にかけての旅に出でぬ。さすらひの身の夜ごとの夢の愴然たりしこといまに忘れず。

何ごとも忘れはてむとあはれなる四十路男はまたも旅ゆく

その男ゆくへ知れずとになりにきと明日の噂にのぼらむもよし

身は雲に心は水にまかすべう旅ゆくわれをとがめたまふな

消息は一行にしてこと足らむ思ひは文字に書きがたきかな

その二

富田屋におせんのゐたる昔より尻長酒はせんすべもなき

肱曲げてひとり寝る夜も重なりぬ今世之介のあはれなるかな

わが著るは紅蓮の翁の古袷にも似るものか旅ゆくによし

伽羅の香もいつか忘れぬ旅ゆけば蓬の香などなつかしきかな

焚喰と呼びしむかしの友に會ひ旅おもしろくなりにけるかな

さすらひぬむかし明石の入道の娘を戀ひし人のごとくに

從兄弟等とあそぶ滋のあはれさを秋の旅寝の夢に見るかな

昭和六年五月、われはじめて土佐の國に遊びぬ。海は荒かりしかども空あかるく、風光の美そぞろにわれの心を悲くものありき。かへりてのち興のおもむくままに「土佐百首」をつくりしが、ここにはその半ばを撰びつ。

わだつみのちぶりの神に船ながら酒を手向けて土佐へ來にけり

あやふきはわが乘る船にあらずして遠ねる人の心なるべし

まづわれにうま酒の樽を送り來て醉へよとぞ言ふ土佐の友かな

うま酒に醉ふともよしや大土佐の山をこそ見め海をこそ見め

大土佐の海を見むとてうつらうつら桂の濱にわれは來にけり

海を見てふと思ひ出ぬ亡き父はいさな船ひとつ持ちておはしき

土佐の海とどろとどろと鳴る夜半に酌みたる酒をえこそ忘れね

大土佐の室戸の沖に立つといふその龍卷の潮ばしらかも

はるばると室戸岬にわれは來ていきどほろしく荒海を見つ

たたなはる岩の間をゆくほどに灌頂が濱に出でにけるかも

はるばると遠ねる人を思へばこそしみじみ匂へ室戸たちばな

思ふこと遠く遙けくなりにけり室戸の濱をとゆきかくゆき

空海が大きみ足のあとも見る室戸岬のたちばなの道

土佐の海の浦戸御疊瀬の幾うねりうねのまにまにゆけばおもしろ

人[illegible]のまことの姿もとめつつ土佐のひと夜を元親記讀む

薩摩潟より吹ききたる風ならめ叔父の柑子の山の香ぞする

その三

昭和八年二月、越後路を經て北陸に遊ぶ。きさらぎ半ばの頃なれば、殘雪は斑らに凍り、四五子と行をともにしたれども、猶寂寥に堪へざるものありき。

きさらぎの夜天に旅を思ふこころ老子莊子にしたしむこころ

旅ごろも土に兎の糞凍る相模野野みち踏みて往かばや

旅ゆかば空しくならむわが庵を阿夫利天狗よ守らせたまへ

かにかくに越路の友はおもしろし待ちねと言ひて蟹下げて來ぬ

長岡の浩然法師わがために酒托鉢をしたまひしかな

旅まくら蘆原の夜の酒さむく冬いかづちも鳴り出でにけり

鳴り出でし雪雷を聽きながらきさらぎ蟹の甲に酒煮る

きさらぎの風寒ければ三國なる汐見櫻はいまだふふまず

われをかし紙魚のたぐひにあらなくに丹後風土記のなかをさまよふ

わびしくも胸にこそ積め丹後なる與謝大山の雪に似しもの

丹後路の旅に讀まむと思はめやあはれ吾妹子先生の歌

丹後なる桑飼村はかしこしや與謝野の大人の生れましし里

たまきはる命も消なむひそかなる思ひ湧きたり梅嶺の雪

縮緬の祭見に來と書きおこす丹後だよりも待たれぬるかな

その四

昭和八年四月、われふたたび北陸にあそぶ。多く蘆原の湯の里にありて、うつうつたる日を送るうちに、ひと日機縁ありて、曹洞第一の道場吉祥山永平寺に詣でぬ。

いまもなほ吉祥山の奥ふかく道元禪師生きておはせる

おん授戒明日よりといふ山淨めわれはも塵のひとつなるべし

縁ありて曹洞一の道場の羅漢の講に會はむ日もがも

ここに來て歌を思へばいつとなく禪のこころとなりにけるかも

由に來て知るひとに會ふうれしさよ大人と吾を呼ぶ法師廉芳

廊さむし消殘りの雪まだらなる東司の裏の苔ふかき庭

廊の板つめたく踏みて大衆の通りしあとの松風のおと

おん齋とともに賤びたるおん珠數のつぶらつぶらにものを思はむ

その五

昭和八年六月、小杉放庵氏等とともに、越後路より佐渡が島に遊びたる後、われひとり、さらに信越二國のあひだにさすらふこと二月あまり、流離のおもひに骨も痩せける。

旅に出づ涙を酒にまぎらしてあるもよけむと思ふまにまに

往ぬべきは往ねしかすがにいささかの愁ひを持ちて旅に出でける

いにしへも西行といふ法師ゐてわが世はかなみ旅に出でにき

鳥が鳴くあづまの友しこと問はば新潟古町練るとつたへよ

もの思はず杯取りて膝組みて太腹撫でてありぬべきかな

痢を病んで矢筈草をばさがすなり越の水無月雨に乏しく

酒荒く心すさみぬいかにせむ救はせたまへ伊夜日子の神

日蓮の消息の字に似るものか檀特山にかかる横雲

みづとりの加茂のみづうみ風寒くますらをわれも酒欲りにけり

加茂の湖はやがて暮るれど山のうへの阿羅々仙めく雲はうごかず

見はるかす佐渡の荒海日の落つる方鞅鞳の空をこそおもへ

海ゆけば佐渡はおもしろまさら川大ざれ瀑も船ながら見つ

二つ龜七瀬八つ浦わだつみのゆたのたゆたに船はい往くも

おもしろし佐渡のはづれの海なかの牛わたり岩を牛のわたれる

さびしやと思ふわが目に殘りゐぬ船を見送る佐渡の鵜の鳥

佐渡はよし日蓮の世のごとくにも檀那おはせる河原田の里

瑠璃堂の藥師如來の眉に見ぬうつし身ならぬもののあはれを

蓮華峯寺丹碧のいろいや古く離々たる草のいとほしきかな

放庵は金北山へのぼるなりわれこそは取れ大きさかづき

わが友が金北山の初山に採りし石楠花ゆるがせにすな

大佐渡の高千のみちにゆきあへど法華道者はものの言はずけり

佐渡に來てふとおもへらく蓑笠の長塚節來しは何時ごろ

靺鞨の風をさかなに酒酌めば千疊敷も廣からぬかな

放庵が巖をうつすしばらくを宿根木の澗に船がかりする

簡島なる竹の葉音のさらさらにふたたび妹を見むとおもはず

雄ごころもなさけにあへば撓むべし佐渡の眞竹のなよ竹のごと

おもしろき佐渡の白石浪來ればこほろこほろと高く鳴るかな

佐渡が島わが世を憂しと思へばか鵜の住む磯もなつかしきかな

その六

昭和八年八月、われは信濃の山を下り、木曾路を過ぎて京阪に出で、さらに遠く海を越えて四國にわたりぬ。伊豫を經て土佐に入り、韮生の山峽猪野々の里に淹留することおよそ三月、都にかへりしは秋既に深き、十月半ばのことなりき。

旅のうれひいよいよ深くなるままに土佐の韮生の山峽に來ぬ

いつはりの世に出でむより大土佐の韮生の峽にこもるまされり

ふたたびは世に出でじなど思ひつつ韮生の峽にひとりこもらふ

物部川山のはざまの風さむみ精靈蜻蛉飛びて日暮るる

山ふかき猪野々の里の星まつり芋の廣葉に飯たてまつる

はたた神いきどほろしく鳴り出でぬいまこそ酌まめ酒廬呂の酒

いきどほろしき心を持ちて酒廬呂のつくれる酒は酌むべかりけり

いついかにいづこに死なむいのちぞと思へば猪野々の旅寢かなしも

雅澄はまことますらをたはれをの名に立つわれやひとり耻づらく

谷ふかき苔のかけはし踏みわけて寒山や來る拾得や來る

土佐ぶみにまづしるすらくこの日われうれしきかもよ叶崎見つ

わが思ひなほほのかにも殘りゐぬ室戸足摺岬みさきに

その七

昭和九年四月、われふたたび土佐に入りぬ。山險しく海荒しといへども、この地の人ごころの直ぐなることは、げにうるはしき墳安の郷のここちこそすれ。片雲の風にさそはるる身も、いでやここにささやかなる廬を結ばめと思ひ定めぬ。

四國路へわたるといへばいち早く遍路ごころとなりにけるかも

海にしてはるばる見れば大土佐の魚梁瀬の山はなつかしきかな

室海をたのみまゐらす心もてはるばる土佐の國へ來にけり

大土佐の韮生山峽いや深くわれの庵は置くべかりけり

巻五　土佐の國猪野々の里にて詠みける歌

その一

猪野々なる山の旅籠の夕がれひ酒のさかなに虎杖を煮る

うちひさす都びとよりよしとして深山百足に親しみにけり

かなしきは人のゆくすゑこの夏も奈翁の傳を讀みて泣かまし

物部川の針金渡舟うちわたり安岡巡査きたりけるかも

旅役者養鱓教師泊りゐて猪野澤の湯の宿はおもしろ

すべてわがあやまちとしてあらましと思ひて籠る土佐の深山に

寂しさに堪ふることにもいつか馴れひとり山居をたのしむわれは

母刀自の老をおもへば涙落つ消息もせで旅に過ごせど

酔ひ臥やる土佐樊噲の太腹もこのごろとみに細りけるかも

母刀自の老のおもかげ夜目に見ゆ酒な飲みそと言ひたまふごと

あへぎあへぎ韮生山路をのぼるなりこの頃しるき衰へあはれ

名は知らね大山祇もたうべます靈薬として山草を食む

山のもの食めば身ぬちも澄むおもひ本草綱目讀まむとぞ思ふ

石に坐し雲をながめてあるほどに維漢ごころとなりにけらしも

かくばかり弱きこころを癒すべき薬草なきか土佐の深山に

やがてここにわれや死ぬると思ふとき猪野々の里も野ざらしの里

その二

しんしんと山峡の夜は更けたれど心いたみて眠られなくに

山風よ韮生の峡にわれありていきどほり酒酌むと告げ來ね

われとわが身をいとほしみ言へらくは酒は飲むとも醉泣なせそ

あしびきの山こもり居のわがためにうま酒もて來伊野部酒麻呂

夜ごとに酒麻呂の酒酌みながら百足の宿に安居すわれは

あらはには笑ぎたはむれ酒酌めどわれ醉ふごとに下ごころ泣く

醉ひ臥して仰寢をすればいつとなく涙あふれてきたりけるかも

にごり酒破竹虎杖乾ざかなありてたのしも山の夕餉も

ちちのみの父のなげきに堪へ居れば額の皺も深くなりにき

ため息を洩らして筆を抛ちぬこのかなしみは書くすべもなし

その三

半跏してものを思へばいつとなく吾も居士顔となりにけらずや

友のごとなつかしきかももの思ふ夜半の
壁にうつる己が影

ほのぼのと死をなつかしむ思ひ湧き山の
深夜のしづかなるかも

われ山の行者ならねど夜ごとに懺悔懺悔
と申しけるかな

ほのぼのと涅槃を繞ふるこころもてねむ
り薬に親しみにけり

いまごろは吾子はやすけく眠るらむ遠ね
る父はいまだ寝なくに

起き出でて深夜の窓をひらきけり胸苦し
さの堪へられなくに

夏ながらねむり薬がしらじらとこぼれて
寒し夜半の机は

去年今年友や幾たり死ににけむ夜はかか
ることのみを思へる

あしびきの石槌山の山精進いまだせなく
に夏去りにけり

第九卷

天彦

「天彦」は、昭和十四年十月、京都市左京區下鴨泉川町の甲鳥書林から上梓された。

裝幀は著者と書肆との共案に成つたもので、紺の布表紙に愛染明王を意味する梵字をひとつ金で捺した。插畫は小杉放庵氏の描いた阿蘇と四國遍路との二圖。猶この歌集には特製本として、黒漆のうへに「天彦」の二字を朱で書いたものがある。

私はこの「後記」に於てこの歌集は、私の歌人としての再出發を記念するものだといふやうなことを書いた。

天彦

韮生の山峽

昭和九年十一月、土佐の國韮生の山峽猪野々の里に、ひとつの草廬を作りて溪鬼荘と名づけぬ。阿闍苦ならぬこの庵に、何を思ふとてか籠りゐにけむ。

寂しければ

寂しければ人にはあらぬ雲にさへしたしむ心しばし湧きたり

寂しければ火桶をかこみ目を閉ぢて盲法師のごともあり夜を

寂しければ或る夜はひとり思へらくむしろ母なる土にかへらむ

寂しければせめて昔のおもひでの華奢風流の夢をしぞ思ふ

寂しければ眠り薬も嚥みにけりしばしの安寝欲るがまにまに

寂しければ爐にあかあかと火を燃やしほのぼのとしてもの思ひ居り

寂しければ鳥獣蟲魚みな寄り來かのありがたき涅槃圖のごと

寂しければ別府の壯士の持てきたる山のわさびもしみじみと嗅ぐ

寂しければ御在所山の山隈に消殘る雪もなつかしと見つ

寂しければ死にたる友の誰彼のことを思ひて目裏熱しも

寂しければ酒をこそ酌めまたしても苦きを啜り醉泣をせむ

寂しければ夜も眠らで明かすなり夢を見てだに命消ぬべし

寂しければことさらゑらぎ笑へどもわが下ごころ人し知らずも

寂しければ自棄のすがたに振舞へどやがて耻づらくおのが弱きを

寂しければ山にあれども土佐の海のゆたのたゆたに心通はす

寂しければ山酒酌めどなぐさまずただしらじらと醉ひつつぞ居る

寂しければ夜半に目覺めのもの思ひあなや腸斷たるるごとし

寂しければ萎ゆるこころも然すがにことに嗔れば猛りやまずも

寂しければ友のごとくに釜を愛づ秀眞が鑄りし釜にあらねど

寂しければ頭をむざと剃りこぼち土佐入道と告るもよからむ

寂しければ寂しきままに生きてゐむひとり飯食しひとりもの書き

寂しければまだ夜明けぬに戸を繰りぬ猪野々の里の深霜のいろ

寂しければ夜のこころもとがり來て不眠の病ひまたも起りぬ

寂しければ霜に寂びたる庭さきに青き石据う赤き石据う

寂しければ或る日は酔ひて道の邊の石の地藏に酒たてまつる

寂しければ御在所山の山櫻咲く日もいとど待たれぬるかな

寂しければ笈摺負ひて出で立たむ四國めぐりの旅をこそおもへ

寂しければ空海をこそただ頼め人の情をいまはたのます

寂しければ昨日をおもひ今日をおもひ明日を思ひぬうつらうつらに

寂しければ薩摩へ往きし初旅のことなどおもふ爐の端にして

寂しければ酔ひて手を拍ち唄うたふ今戸盆喜の顔もおもしろ

寂しければ酒麻呂いかに新醸り香やいかになど思はるるかな

寂しければ垣に馬酔木を植ゑにけり棄て酒あらばここに濯がむ

續寂しければ

寂しければ自在の竹の煤竹に懸けし茶釜も鳴りか出づらめ

寂しければ由旬の空のあなたなる人の洩らせるため息も聽く

寂しければ雉子撃つ銃の遠音さへ冴え冴えとして胸にひびくも

寂しければ深山の石を庭に据ゑ腰うちおろす阿羅漢のごと

寂しければ約百記も讀みぬたはやすく救はるるとは思ほえなくに

寂しければ叛きしものを打たむより己を打つべく答をこそ取れ

寂しければ催馬樂めきしざれ歌も醉のまぎれにうたひさふらふ

寂しければ冬なほ生きてある蟲の命かなしと思はざらめや

寂しければ世のあざけりを身ひとつに負ひてわれあり悔ゆといはなく

寂しければ古りし自在を爐のうへに吊るして思ふかへらぬことを

寂しければ山どびろくをあふるべう生椎茸を爐火の上に燒く

寂しければこころも枯るるおもひして鬢こそ白め夜毎夜ごとに

寂しければぬばたまの夜の闇ふかく吼嗆の鳴くこゑの聽こゆる

寂しければ夕かたまけて聽くほどに心にひびく山鵐のこゑ

寂しければ在りし日のこと思ひ出でて芝香の詩にも親しみにけり

寂しければ浪華蘇小の消息も來すやとおもふ待つにあらなくに

寂しければ目閉ぢ口閉ぢ涙頰につたふにまかせ仰寢するかも

寂しければ土佐の風土記讀みつつも叶岬の岩をしぞおもふ

寂しければ鱒の卵の孵化るにもほのぼのとして心ときめく

寂しければ夜のつれづれに取う出たる味噌煎餅のしめりわびしも

寂しければ昨夜のなごりの酒おくび吐きつつぞ飲む石楠の茶を

寂しければ遠居る人のなさけのみひた思はれて眠りかねつも

寂しければ爐に酒を煮て今日もあり韮生山峡冬深みつつ

寂しければ御在所山の山みちを滑る木馬にわれも乗らしめ

寂しければ霜降る聲もなつかしくそぞろにすなり夜戸出朝戸出

寂しければふとしも思ふうちひさす都大路を練りし日のさま

寂しければ大山祇にもの申すこよひばせめて雨な降らしそ

寂しければこころ痛みぬ胸ぬちに蝎のたぐひ住むにあらねど

寂しければ人をしのばむよすがにと竹花籠に寒菊を挿す

寂しければ千里あなたの人をさへ咫尺に置きてもの思ひする

寂しければこころ弱くもなりにけむ空見てあるに涙落ちたり

寂しければいきどほろしく石楠の杖をふるひて山風を斬る

寂しければ時ならねども霹靂神とどろとどろと鳴れよとぞおもふ

寂しければうつそみもなほ飛ぶごとし御在所山の雲ならなくに

寂しければはやくも丑に起くるなり夜半の爐酒のなつかしきまま

寂しければ夜の障子を吹く風も衣摺のごと思はるるかな

寂しければ乾漆佛のにほひすと部屋ぬちを見る心落ち居す

冬夜獨座

火の消えし爐をまへにしてもの思へばこころや燻る涙にじみ來

夜ふかく石楠花の葉を煎ずれば己が命さへかそけかりけり

爐に火なし冷たき灰をながめつつおもふおのれが寒きいのちを

人の世のなかばを過ぎて癡愚われややうやくに知る悔ちふことを

目蓋裏にはかに熱し爐のほとり遠ゐる人のなさけ思へば

うつらうつら遠ゐる人をおもふなり爐の火の消えしことも忘れて

衣摺の音さやさやとするごとし爐端まろ寢の耳のうつつに

春の來てやがて塞がむ爐のほとり遠ゐる人を見むよしもがも

爐のうへの炬燵櫓に板置きしわが文机のあはれなるかな

生き殘りゐし蟷螂のおとろへをこの夜爐の邊に見るがあはれさ

爐邊の友

わが草廬を訪ひ來し友の誰彼を思ふ

友よ醉はば杯を置き目を閉ぢてしばしは聽きね物部川音を

濁り酒酌まめと言ひて雉子撃ちの猛者もたづね來雪のゆふべを

夜に入らば雪深からし尾根越しの火筒の音の冴えてひびくも

爐をかこみ雉子を炙りて酒酌めば雪いや深くおもほゆるかも

世に出でじ骨この山に埋めむとわれ述懐す年のはじめに

溪鬼抄

三月あまりの旅より歸りて

百日餘り見ざりし庵の庭石に韮生山苔つき初めにけり

吾を待ちていしくも在りぬ火のあらぬ爐と冷え果てて鳴らぬ茶釜と

人住ます夏を過せばわが庵は蜈蚣も出でずなりにけるかも

古袷行李より取う出袋下げ旅往きしより幾日經にけむ

大土佐の御在所山の朝雲はもそろもそろとゆきて親しき

ひと夜寢てあした目覺めのすがしさや物部の溪を雲湧きのぼる

山燒の灰もなつかし筑紫なる大阿蘇山の霽ならなくに

拾ひ來し阿蘇の山石まへに置きてふとおもへらくわが舍利に似る

古袷旅のころもは萎へぬれどわれのこころはいまだ萎へずも

目に見えね寂しきにほひ立てにけり旅のころもの筑紫路の塵

わが庵の厠のまへの竹いたく茂りぬ夜半に鳴るはこの竹

竹を伐る音かうかうとひびくとき韮生山
峡冬や立つらし

わが留守に益喜の植ゑし石楠花も秋近う
して根づきけらしも

茄子を燒き山酒酌みてほのぼのと遠びと
思(も)へば夕餉たのしも

ひさかたの月の夜なれば酒酌まむ益喜も
醉ひねわれも醉はまし

月夜よしこよひの酒のさかなには生椎茸
を燒くべかりけり

人もあはれ吾もあはれと思へどもうつそ
みなればせんなきものを

これをしも艶生涯(えんしやうがい)と言ふべくばあまり寂
しきわが世なるかも

無賴の名たはれをの名もあながまと聽き
棄てて來(こ)しわれにやはあらぬ

目を閉ぢて牛跏を組みて或る夜半はほの
ぼのとして涅槃おもふも

山ごもり濁り酒酌みあるもよしむかしの
夢を見てあるもよし

あけがたに起きてもの書くならはしも寂
しとぞ思ふ風音聽けば

筆はたと動かずなりぬ夜はまして思ふに
堪へず遠ゐる吾子(あこ)を

獅子もなほ羅漢の膝に眠るなりしばしの
眠りわれにあらしめ

都塵抄

昭和十年三月、ひさびさにて都へ歸りたれど、
感懷の情は日を經るに從つて深く、捨身無常
の思切なるままに、ふたたび流離の旅に出で
ぬ。都塵の中に在ること僅かに數月。

流離の果

うちひさす都もさびしかへり來れば與謝野の大人はすでにおはさず

淺草に凌雲閣のありしころ戀しとおもひ大空を見る

淺草の觀音堂の鳩にすら心馴寄りておもふことあり

ひさびさにかへり來れどもかたくなに銀座の違いまだ踏ますも

都邊に日を經月を經あれどなほ遍路ごころの失せぬわれかも

うちひさす都か土佐の山峽かわかでわれありうつらうつらに

土佐をおもふ

幾とせをひとりわびしく籠りゐし土佐の山峽思ひつつぞ寢る

大土佐の韮生の峽のわが庵もさびしからまし主人なければ

虎杖に山鹽つけて食むこころ土佐を思へばえこそわすれね

石楠花の杖を突きつつさまよひし韮生山峽夏は來ぬめり

夏ちかし石槌山の山びらき明日明後日にかなりやしぬらむ

病中口占

杯を棄てむと思ひさだめてはいきどほり酒酌むよしもなし

ものの本何かは知らず讀むほどに涙落ちぬ氣やはおとろふ

やがて頰にやや熱きもの流れ來ぬやまひの床に吾子をおもへば

生くべきか死ぬべきかなど思ひつつうつうつたりや今日も昨日も

いつまでも胸に殘りて忘れえぬ微塵の恨み人に知らゆな

しくしくと病めば胸ぬち痛むなり微塵のうらみ殘るばかりに

ありがたき佛陀の國の藥草を今朝も煎じて飲みにけるかも

南蠻の草を煎じてそぞろにも摩訶不思議なることをおもへる

もの言はば涙にはかにあふれ來むここちおぼえてもの言はずけり

己が影をわが世ひとりの友としてものをこそ言へ壁に疊に

蒼蠅なすひとのけうときしりう言聽かでこもれば病むもまたよし

はるばると病ひの床におもふなり猪野々の里の盂蘭盆のさま

淡泊無酒

おほかたの酒のここだく飲みつくし土佐樊噲はおほらかに寢る

酒飲ますあれどものに醉ふごとしわが世の旅の愁ひにか醉ふ

またしても奈翁の傳にしたしみぬ末路かなしきゆゑにかあるべし

いまもなほ醉ひ癡れ癖の殘りゐてとすればわれや肱曲げて寢る

あばれ酒憤り酒幾とせかつづきしのちの寂しさかこれ

醉ひ痴れしとろとろの目に須彌山を見しも昨日となりにけるはや